

---

# 異常気象のセカイ

辻端耕太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異常気象のセカイ

### 【Nコード】

N0275W

### 【作者名】

辻端耕太郎

### 【あらすじ】

異常気象が世界各地で発生している近未来。

世の中のバランスを崩すキーと成り得る一人の少女が、突発的に家を出した。

ここぞとばかりに彼女を誘拐しようとする、謎の組織。

彼女を保護しようとする奔走することになる、巻き込まれただけの少年。

大雨の降りしきる街中を、それぞれが思惑をもって駆け廻る！

## 家出した少女と、危機一髪な少年

20xx年、夏

嵐の吹きすさぶ街中を、1人の少女が、傘もささずに走っていた。

「もう、最悪！」

彼女は思わず悪態をついた。ずぶ濡れになった学校の制服が重く体に張り付き、気持ちが悪かったためである。

彼女、水杜葉月みなもりのつきは本来、このような悪天の中、当てもなく街中をうろつくなどという馬鹿馬鹿しいことをやる身分ではないのだが、訳あって今は濡れ鼠に甘んじているのだった。

それにしても、忌々しい雨だ。もう三週間も降り続けている。つい数年前までは、日本はこんな気候ではなかった筈だ。やはり、例の話は本当なのだろうか。

彼女は、今年に入ったあたりから、日本各地でまことしやかに囁かれている、ある都市伝説を思い出していた。

それは、巷では「気象テロリスト」などと呼ばれる、秘密組織の存在にまつわる噂であった。

その噂によれば、数年前からこの国で頻発している異常気象は、ある秘密組織が意図的に起こしている、というのである。

あまりにも荒唐無稽な話だが、こんな噂が流布したことには、それなりの背景があった。

まず、気象工学が発達したことにより、ちょっとした気象操作ならば、理論上は可能になってきたことが、一つの要因だ。例えば、数

年前から、干ばつに苦しむ途上国に対し、先進国の共同チームが支援の一環として、雨が降りやすくなるように、上空に特殊な粒子を散布するというのが、何度か行われている。

こうした事実が、気象現象を操作するという話に現実味を持たせているのだ。

二つ目には、局地的な自然災害が、ここ数年増えたという事実がある。確かに今日のような大雨や洪水は各地で頻発しているし、二年前にはN県において、この国には極めて珍しい、大規模な竜巻が発生し、大きな被害がでた。

こうした実際の災害が、国民の不安を掻き立てたために、「気象テロ」などという流言飛語が簡単に広がったのだ。

さらに、極めつけとして、どこかで災害が発生する度に、「犯行声明」をだす者がいるのだ。

例えば、さっきの話に出たN県の竜巻の際には、災害の直後インターネット上に、自分達がこの竜巻を発生させたのだと主張する者が現れた。その声明には、竜巻の規模や進路、最大風速などのデータが示されており、当時かなりの騒ぎになった。

その後、実際の竜巻の検証が進み、どうやらこの声明は狂言であった可能性が高いとされるようになった。

しかしこの件以降、どこかで大きな災害があると、似たような声明が度々出されるようになっており、中には「本物らしい」とされる犯行声明まで出てきた（あくまで“らしい”なので、きちんとした根拠はないが）。そんなわけで、今では、陰謀論者ではなくとも、どこかで災害が起きたと耳にすると、「もしかして」などと、この噂を思い出してしまふような状況なのである。

さて、大雨に濡れ、つい日本の現状などを思い出しながら、葉月はそろそろ、考えなしに親元を飛び出してしまったことを少し後悔し始めていた。

しかしすぐに、こうでもしないとあの親たちは、私の言うことに耳

を傾けようとはしないだろう、と思い直した。こうなれば、とことん家のものから逃げ回って、うんと困らせてやるう。今までずっと言われるままに従ってたんだから、その分反抗してやるう。

そんなことを考えながら彼女は、ひとまず雨宿りができる場所を探して、人気のない、使われているのかもわからない雑居ビルの、入口の庇を見つけた。

彼女はここでしばらく、雨が弱くなるのを待ちながら、逃避の計画を練ることにした。これまでの動きは全く行き当たりばったりだったが、習い事や勉強など、いつも予定通りのことをやってきた彼女にとって、それはかえって、うきうきすることだった。

こんな逃亡は一時しのぎにもならない不毛なことだとわかっていながらも、彼女はこの時間を意味の大きい、切実なものに感じていた。

×××

木林周は、いつの間にか、不良少年のレッテルを貼られていた。

しかし、彼は優等生ではなかったが、別に大きな問題を起こしたこともなかった。強いて彼の問題になりそうなところを言うとするれば、負けん気が人一倍強いところと、昔から大人に対して従順ではなかったところだろうか。

例えば、彼のこうした性格は、小中学校時代にはよくあるちょっとしたケンカの際にも、仲裁に入った教師をいくらか余計に怒らせることになったかもしれないし、そのことが後々の自分の立場を不利

にしていった面があるかもしれない。

また、彼は暴力が好きでなかつたが、やや小柄な体格にしては腕っ節が強いほうではあつた。彼はその性格のおかげで上級生から反感を買つこともあつたが、別に相手の学年が上だからといって怖じ気づいたりもしなかつたので、結果として彼の武勇伝中の撃墜リストには、先輩方の名前も散見された。

まあそんなわけで、彼は別にいじめっ子でも乱暴ものでもなかつたが、彼を必要以上に恐れるもの、睨むものが結構な数いるというのが、事実だつた。

今年になつて彼が高校に上がった頃には、相手を木林周と知つてケンを売ろうというものは皆無であつた。

さて、彼に不良のレッテルを貼るものがある一方で、彼の本質を知る者もきちんといた。

周の家族は、彼が決して自分からは人を殴らないと知つていた。特に兄の光は、周とは正反対の穏やかな人間であつたにも関わらず、兄弟仲がよかつた。彼こそ真の理解者であつた。周はいつも、兄のことを呼び捨てにしていた。しかしこれはいわば、彼の流儀であり、兄弟の間に遠慮はなかつたが、キチンと兄を尊敬しているのだ。

光もそのことを理解しているので、弟に呼び捨てにされることを全く気にしていなかつた。むしろ、互いに気兼ねなく呼び捨て合う關係を好んでいた。

こういう理解のある家族がいたからこそ、彼は、本当の問題児になることなく、まっすぐ育つたのかもしれない。

そんな木林には、性格とは別に、もう一つ、特徴的な性質が付属していた。それは、交通事故に遭いやすいという困つた体質であつた。別に彼が不注意な訳ではないし、無茶な行動をしている訳でもない。その証拠に、今までに遭つた事故は全て、相手側の過失か、不慮の

事故かで片付けられている。

ただ、関わった事故の規模はどれも、決して小さくはなかったにもかかわらず、幸いにも、今まで彼が大事に至ったことはなかった。車にはね飛ばされても、乗っていた自転車が大破しても、周自身はほぼ無傷だったのである。これはもう、悪運としか言いようがない。そしてまさに今も、彼は人生で何度目かの大事故に遭ったところだ。しかし今回も、彼は奇跡的に無傷であった。

大雨で視界が悪い中、一台の車がスリップしてガードレールを突き破って来たのだ。

周は危うく、いろいろ（主に魂とかを）持って行かれそうになったが、間一髪で助かったのだ。

とっさにジャンプしたら、周は車の天井に尻から乗り上げて、そのまま車の後ろ側までスルンと滑り抜けたのである。

一方で突っ込んできた車の方は、周がよく通りかかる、工場の外堀にぶつかって止まった。ガードレールにぶつかる前からブレーキをかけていたようなので、衝突のスピードはかなり落ちていたようだが、それでも大きな音とともに、ボンネットが原型を損ねる程度の運動エネルギーは有していたようだ。中の人は大丈夫だろうか。

周としては、危うく轢かれかけた自分が、車に乗っている側を気遣うというシチュエーションに、ある程度の違和感を覚えたが、今はそんなことを言ってる場合ではないので、車の後方から中を覗き込んだ。

降りしきる雨にうたれながら目を凝らしたが、どうやら、後部座席には誰も乗っていないようだ。それをみて周は、今度は車の右側に回り込む。すると運転席に、男がハンドルにつっ伏す形になっているのが見えた。

周は落ち着いてドアに手をかける。幸いドアはそれほど変形しておらず、簡単に開けることができた。

すると運転していた男は、すぐに顔を上げた。どうやら意識はハッキリしているようだ。しかし、唇から血が赤くにじみ出ており、い

かにも痛々しかった。どうも自分の歯で口の中を切ったらしい。この分では、話すのも辛そうだ。

「大丈夫ですか？念のために救急車を呼びましょうか」

周がそう話かけると、車の男は、何かを言いかけたが、傷の痛みで顔を歪め、しばらく黙りこんでしまった。

周は、無理して話さなくてもいいと男に告げると、黙って救急車を呼ぶことにした。

救急車が来るまでの間、男は周に対し、しきりに何事かを言おうとしては、口の中の傷の為に苦しみ、用を為さないのだった。

周はその都度、

「おっさん、怪我人なんだから、大人しく寝てろよ」

などと言って男をなだめているのだが、男はあがくのをやめないのだった。

「ウスメホ、ハヤフヒフへ、痛！ヴー！」

痛みの為に、口唇破裂音をうまく発音できない男は、傍目からはひどく惨めで、滑稽でさえあった。男があまりにも必死なので、面倒なことが嫌いな周にしては根気良く、言っていることを聞き取るうとしたが、やはりお手上げなのだった。

やがて救急車とパトカーが到着し、話ができない男の代わりに、周が二、三の事情を説明すると、男はやはり、念のために病院に搬送されることになった。

周からの一通りの説明が済んだ後も、男はしばらくの間、噛み付かんばかり剣幕で救急隊員に何かを訴えていた。しかしやがて、救急車に乗せられ、隊員は搬送先の病院を探し始めた。

この頃になってようやく、周は開放された。やれやれ、と周が現場を後にしようとした時、救急車の方から救急隊員が周を呼び止めた。なんでも、男が周に対し、どうしても何かを伝えたがっているというのだ。周がそれを聞き届けてやらないと、大人しく病院に運ばれ

てくれそうにないらしい。仕方なく周は、停まっている救急車へと赴いた。

男は、救急隊員から与えられた紙とペンで筆談をして意思表示していた。そこに、呼び出された周が現れると、男はいきなり筆談を中断して、一枚の厚紙を懐から取り出した。そしてその紙に何か、走り書きをはじめたのだった。

何かを書き終えた男は、その紙をいきなり周に差し出した。なにやら目が血走っていて、今まで以上に必死な形相だ。周がその紙を受け取ると、男は、今度はいきなりふつと力が抜けたようになり、さつきまでとは打って変わって大人しくなった。

それをみて救急隊員は安堵し、周に軽く礼をいうと、さっさと男を病院へと運んで行ってしまった。

周はひとまず受け取った紙をポケットにしまうと、今度こそと、現場を離れたのだった。

全く、夏休みだというのに、面倒なことに巻き込まれてしまった。

周は大雨の中、15分程歩いて、普段だったら絶対に入らないような、駅中の喫茶店に腰を落ち着けると、深いため息をついたのだった。

持っていたハンドタオルで、できる限りぬれた所を拭きとったが、それでもまだまだ少し寒く感じたので、ホットコーヒーを頼むことにした。

ミルクなし、代わりに砂糖はたっぷり入れたコーヒーを飲み終わるころ、周はふいに、男に渡された厚紙のことを思い出して、ポケットを探った。

厚紙は、写真だった。

一人の少女　ちょうど周と同じくらいの年齢かにみえる　が写っている。男はこのウラに、走り書きをしたのだ。

走り書きは読みとるのが困難で、ところどころ文としておかしいところもあったが、読み取れた内容を要約すれば、大体以下のような事を示していた。

- ・ この写真は、男の娘である、水杜葉月を写したものであること。
- ・ 彼女は今朝、家のものと一緒にこの街に出かけた際に、家出を宣言し、どこかへ飛び出してしまったこと。
- ・ 運転の男は彼女を捜してこの街をあちこち走っていたが、運悪く車がスリップしてさっきの事故になったということ。
- ・ 男の他にも、彼女を探しているものがあるということ。
- ・ 男は周に、彼女を探して欲しいと思っていること

周は何度か文を読み返したが、困惑するしかなかった。

文の内容が、あまりに支離滅裂だからだ。

特に最後の部分は謎だ。何故、周が彼女を探す必要があるのか、まったく理由が見当たらなかつた。

あの男は単に事故で気が動転していたとかで、必要以上に興奮していただけであり、この文章には特に意味はないのだろうか。

そう考えると周は、なんだか全てが急激に、バカバカしく思えてきたのだった。

しかし、一方で周は、どうしても男が何か、重要なことを伝えようとしていたような気がしてならなかつた。

あの男が周にしきりに何かを訴えかけていた時の、あの眼。あれは、常軌を逸していたかもしれないが、正気を失ってはいない眼であったという、確信があつたのだ。

周はもう一度丹念に、走り書きを読んでみることにした。

すると彼は、あることに気が付いた。

・ 男の他にも、“彼女を探しているもの”がいるということ。

文章中のこのことを書いた部分だけが、他の箇所とは違うニュアンスで書かれているのだ。

まるで、彼女は“家のもの”以外の何者かに、『追われている』というような書き方だ。

そう考えてみて、周はハツとある可能性に思い至った。

運転の男が“彼女を探しているもの”よりも、先に娘を見つけなければならなかったのだとしたら？

もしそうならば、上記の内容は、下の内容の、

・ 運転の男は周に、彼女を探して欲しいと思っている

という部分に繋がってくる。

これを踏まえてもう一度、文章全体を考慮すると、どうもこういうことになりそうだ。

水杜葉月は家出で逃亡中であるが、“彼女を追うもの”が存在するために、男は彼女を早く見つける必要がある。しかし事故に遭ったために身動きが取れなくなったので、仕方なく、行きずりの周に、彼女の搜索を依頼した。

全く、これはこれで唐突すぎて、バカバカしい話ではある。

周は元来、このような、訳のわからない頼み事を、ハイそうですね、と引受けるような、お人好しではなかった。

しかし、あの男の必死な訴えを思い出すと、どうもこの頼みを見捨てる訳には行かないような気もした。

やがて周は、ほぼ即断で、ほんの気まぐれ程度に、水杜葉月の捜索に乗り出すことを決めてしまった。周はあれこれ迷うよりは、直感にしたがって物事をきめてしまうことが多かった。今回も、彼は自身の直感に従うことにした。別に直感に逆らう理由は見当たらなかった。それに、どうせ今日は、ゲームセンターにでも寄って帰ろうと思っていたほど暇だったのだ。

周は、文書を裏返して、そこに写っている、水杜葉月の姿を改めて見ることにした。

控えめに笑う写真の中の彼女は、大人びているが、反面、どこなく世間知らずそうな雰囲気があった。なんだか、箱入り娘っぽい。

そういえば、運転の男　つまり彼女の父親だが　が乗っていた車は、相当に高そうなたった。なるほど、お嬢様ってわけだ。

こんな娘がこの街で当てもなくうろついているのだとすると、親としては気が気じゃないだろう。

このY市には、駅周りをちょっと外れると、治安の悪い地区がチラホラあるからだ。

さて、どこから探したものか。

彼女の父親が、あの工場の辺りで事故っていたことを考えると、あの地区から探すのが、正解なのだろう。今のところ他に手がかりは無いのだし。

そう考えた周は、さっと伝票を持って立ち上がると、コーヒー代を支払い、駅中の喫茶店を後にした。



**協力者と合流した少年と、追跡者に遭遇した少女（前書き）**

前回までのあらすじ

木林周は、事故車を運転していた男から奇妙なメッセージを託される。メッセージを読み取り、水杜葉月を捜索することにした周は、ひとまず事故現場に戻って、その周辺から彼女を探すことにする。

一方で、葉月は、自身に危険が迫っていることをつゆとも知らず、人通りの少ない街中で、のんびりと雨宿りしているのだった。

## 協力者と合流した少年と、追跡者に遭遇した少女

周は再び大雨の中を歩き、事故現場に戻った。

既に事故車両は撤去されており、ガードレールが破れた部分には、応急処置でコーンが三つ並べられている。

さて、この辺りで、家出した女が逃げ込みそうな場所となると、限られてくる。多分西側の、再開発地区の方だろう。あそこはいい感じに無秩序で、身を隠し易い。徒歩でもここから二十分ほどでいける。

そう当たりをつけて周が西向きに方向転換したそのとき、目の端に、怪しい人物がひっかった。

黒いレインコートに身を包んだ男。

大雨警報区域に入ったために人通りがほとんど無いこの街中で、その男はなにやら、キョロキョロと当たりを見回していた。こんな日に、こんな場所で何をやっているのか、聞いてみたいものだ。実に怪しい。(実のところ、今こうして街中をうろついている周自身だって職質されても文句が言えないくらいに怪しい。警報区域内では住民の行動は制限されるからだ。)

周が思わず足を止め、その男の方をみると、レインコートの男がこちらを振り返るのは、ほぼ同時だった。

やばい。目が合った。

周がそう思ったときにはもう、男は、つかつかと、こちらに向かって歩いてきていた。

思わず身構えてしまった。

すると男は、懐から出した一枚の写真をみせて、こうたずねてきたのだった。

「えーと、君、この辺りで、こんな子を見なかった？」

見れば、その写真に写っているのは、今まさに周がさがしている人物、水杜葉月のものだった。またこいつの写真か。

周はなんとなくうんざりして、思わず口走った。

「こいつの写真を懐に入れて持つのが流行ってるんですか？」

「…え？何か言ったかい？雨ではつきり聞こえなくて…」

「……独り言ですよ」

黒いレインコートの男は、大矢と名乗った。聞けば、警察官だそう  
だ。手帳を見せてもらったが、あいにく周は、それが本物かどうか  
を見定めるための知識はなかった。

周は、水杜葉月を追っているものがある以上、この大矢という男に、  
自分が彼女を捜すように頼まれたことを話すのは、やめておいたほ  
うがいいだろうと考えた。それに、水杜葉月の父親は、わざわざ通  
りすがりの高校生にすぎない周なんかには捜索を頼んだくらいだから、  
ひょっとしたら彼女が家出したこと自体、警察にも言わないほうが  
いいのかもしれない。そして何より、このレインコートの男こそが、  
“彼女を追うもの”である可能性があるのだから、滅多なことでは言  
えない。

しかし、いくらか話をするうちに、周には、どうやら大矢が本当に  
警官らしいと思えてきた（根拠はなく、勘にすぎないのだが）。こ  
うなれば、多少はこちらの情報も明かしてやってもいいかもしれない。  
うまくいけば、話と引き換えに、大矢の知っていることを教え  
てもらえるかもしれない。

雨音がうるさいので、ひとまず二人は、道の脇に停めてあった大矢  
の車に乗り込んだ。

周はまず、先刻ここで例の事故に遭ったことを話した。

「やあ、すると、巻き込まれた少年ってのは君だったのか。ホント  
によくもまあ、無傷だったんだね！」

「……はあ、おかげさまで」

「それで君は、なんでまた、大雨の中、わざわざここまで戻ってきたんだい？」

「あー、それは……」

一瞬、周は本当のことを言いかけたが、すぐに思いなおし、

「なんとなく、現場がどうなったか気になったんで。事故車両がどうやって処理されてくのか、見たかったんですよ」

と言って誤魔化した。

「はは、そうか。一足遅かったね。ついさっきレッカーが運んで言っただよ。」

「ああ、そうですか」

周は、一応、悔しいという素振りをしておいた。

「……それで君は、その運転手から、何か聞かされなかったかい？」

「……いいえ、何も。彼は口の中を切ったらしく、まともに話せる状態じゃなかったのよ」

「そうかね。救急車と警察が到着するまで、10分はかかったはずだから、何か話していてもおかしくないと思っただがね」

「ああ、いにく様だ。あの男はその10分間、ホントに話せなかったのだ。もつとも、救急車が到着した後で、周は例の走り書きを託されたわけだが、今はそのことは黙っておくことにした。」

「それで、」

と、今度は周の方から切り出した。

「それで、この事故と、さっきの写真の女の子とは、何か関係があるんですか？」

「ああ、この写真の子は、例の運転手の娘さんでねえ。今朝、突然家を飛び出してしまったそうなんだ」

「そこまでは周も知っている。あの男から渡された走り書きからも読み取れたからだ。だが、知りたいのはその先だ。」

「でも、ただの家出少女捜索にしては大げさじゃないですか？観たところ彼女は、家出したところで、そこまで躍起になって捜さなきゃいけない年齢じゃないでしょう？」

周はそういつて暗に、彼女を早急に捜し出さなければならぬ理由が他にあるのではないかと、探りをいれた。

走り書きにあった、“彼女を追うもの”の存在。これについて、この大矢という男は、何か知っているのではないかと考えたからだ。周のこの問いに対し、大矢は一瞬、考えこむような表情でうつむいたが、すぐに顔をあげて、彼の方に向き直ると、改まった口調でこついった。

「よろしい。君はこの件について、僕に話した以上のことを知っているそうだね。君が僕のことを信用して、知っていることを全て話してもらうために、まずは僕の方からできるだけのことを話そう。どうかね？」

おっとと。やはりバレていたのか。周は、自分が隠し事は苦手なのだと、改めて自覚した。まあいいだろう。

「話が早くて助かります。まどろっこしいのは苦手なので」  
周は屈託なくそういうと、ニツと笑って見せた。

「ははは、よろしい」  
それを見て大矢は苦笑した。

×××

「まず、僕の立場から話すとしよう。君は、僕が本当に警官かつてことから、疑っているみたいだからね」

「はい。正直いつて、そのレインコートは不審者にしかみえませんよ」

「あはは。職業柄、しょっちゅう警報区域で活動するからね。壊れやすい傘をさすよりも、これを着てるほうが機能的なんだよ。」  
なるほど。近頃はハイテク素材のレインコートも出回ってるし、傘にこだわる必要もないのかもしれない。

いや、そんなこと今はどうでもいい。周は話の続きを促した。  
「それで、あなたの所属は？」

コートの性能を自慢したかったらしい大矢は、やや間をもって応え

た。

「ああ、ESP関連特務だよ」

「……！」

ESP特務だった？

周は思わぬ単語を聞き、少なからず驚いた。

大矢は話を続ける。

「その反応を見るに、君は水杜葉月が何者なのか、知らないようだね」

「……どういう意味ですかまさか」

「彼女は、国内有数のESPなのさ」

周はそれをきいて、自分が、思ったよりも厄介な事件に巻き込まれたのだと理解しつつあった。

「それじゃあ、あなたは……」

「ああ。あの娘の警護役にして、監視役みたいなものさ」  
「……」

ESPといえば、今、世界各国（特に先進国）が躍起になって研究している、人類未踏の領域のことである。主に人間の脳の潜在能力を引き出す研究分野を指して、ESPベンチャー、ESP研究などと呼ぶのが一般的だ。しかしその手法や理論、目的は、研究者によってまちまちであり、はっきりとした定義はない。

そもそも、その研究が科学的に成り立つのかどうかを疑問視する声が多くあり、各国の機関も、手探りのような状態で研究しているのが現状だ。

では、何故そのような曖昧で怪しいものが、大々的に研究されるようになったのか。

それは、各国首脳が、ESPという存在について、「無視できない程度に重要である」と考えざるをなくなる、奇怪な事件が起きたからである。

通称“B・B事変”と呼ばれるその一件以来、拡大された人間ESPを育成し、制御し、管理することが、国防上の急務であり、政治、経済のパワーバランスを左右する鍵になるという認識が広がったのだ。

周は上述のような、自分のもつESPに関する知識を呼び起こして、話を整理すると、大矢にこうたずねた。

「じゃあ、あなたは本来、水杜葉月をマークしてないといけないんですね？」

「まあ、そうなるね」

大矢は頭をかきながら、罰が悪そうに応えた。

この様子を見る限り、彼はどうやら警護対象の水杜を見失ってしまい、困っているようだった。

「ちなみに、水杜葉月ほどの程度に監視が必要なレヴェルのESPなんですか？」

「なに、彼女は自由なほうさ。外出先を事前に届け出れば、たいいてい場所には自由に行き来できる。今回みたいな場合を除いてはね」

「……？どんな場合なんです？」

「おいおい、ここは今、警報区域内なんだよ？」

「ああ。忘れてたわ」

「君ねえ……。体力に自信があるようだけど、少しは気をつけたまえよ？」

大矢は呆れ顔でそういった。

警報区域では、市民の行動は制限される。区域内では、用のない市民は外出を控えなければならない。

それは、市民の安全を考えた行政措置であり、普段から回覧板やテレビなどで徹底的に呼びかけられている。

三週間前にこのあたりが警報区域に指定された時には、周の学校でも、再三注意事項を聞かされた。警報の結果、夏休みが少々早く訪れることになったのは良かったものの、外出制限のために遊びまわ

れないのは、周のような若者達にとって苦痛であった。

まあつまり、今日のように雨が弱めの日には、遊びに出ない手はないというわけだ。周は外出制限をやむやにして時々遊び歩いていたので、この街が警報区域内にあることを忘れかけていたのであった。

「すると今回、彼女は届出無しに、無断でこの地域に？」

「いや、そういうわけでもないんだよ。彼女の父親はあらかじめ、娘を伴ってこの街を訪れることを届け出ていたからね」

「ええ？それなら何故、彼女を見失うことになったんです？」

「迂闊だったよ。父親の車に乗っている彼女に、道中で何かあることは無いだろうと思って、僕は署から直接、目的地に行ってたんだ」

「……それって警護の意味あるの？もの凄くずさんでお粗末に聞かせるんだけど」

「ぐツ……。仕方ないじゃないか。警護と云ったって、ESPをとっ捕まえて、どうこうしようなんていう連中はそういないだろうしさ。大体、お偉いさんは、ESP一人一人にばっちり警備をつけようなんて、気は最初から無いんだよ、費用がかかるから。何かあったときに言い訳が立つように、俺みたいな若いのを一人だけ割り当ててるのさ」

「まさか、警護と監視を一人で?!」

「ああ。無理のあるはなしだろ？これ、本当なんだぜ？」

「あんたが休みの日はどうすんの？」

「ノーガード、ノーマーク作戦」

「世間ではそれを作戦とは言わないんだよ!!!」

「おっしやるとおり。面目ない」

「それで、何であんたはこの事故現場に来たの？」

「事故の知らせを受けて、飛んできたのさ。でも、車に乗っていたのは父親だけだと言うし、どうなっているやら……」

×××

「さて、次は君が話す番だ。僕はかなり洗いざらい話したつもりだから、君にも是非そうしてもらいたいね」

大矢は言った。

周はこれまでの話を総合的に吟味した結果、どうやら大矢が信頼に足るようだとは判断したので、知っていることは全て話すことにした。水杜葉月の父から走り書きが記された写真を託されたこと。

それと、彼がしゃべれないような怪我をしながら、必死で何かを訴えていたこともだ。

メモ書きの内容を大矢に見せると、彼の疑問は一つ解消された。

「なるほど。彼女は道中で、車を飛び出していつてしまったんだね。それにしても家出とは…。やっぱり反動かねえ」

「反動？」

「ああ。警護について僕から見ると、彼女の暮らしぶりは、実に窮屈そうなんだよ。毎日学校の後は塾や習い事で、友達と遊んだりする暇も無いみたいなんだ」

「それは……俺だったら発狂しますね」

毎日、学校をホドホドにサボりつつ、遊び歩いている周とは正反対の暮らしぶりだ。

「それにしてもこの、“彼女を追うもの”というのはなんなのだろうね？」

周は、大矢が自分と同じところに引つ掛りを感じているのをみて、先刻の考えに確信をもった。

水杜葉月は現在、何者かに追いかけておられ、すぐに保護する必要があるのではないか。

周はこの考えを、思い切つて大矢に話してみた。

「まさか……いや、しかし……」

大矢はそれを聞いて、しばしの間、何かを考えている様子だった。

周は先を促す。

「大矢さん、彼女を追うものの存在に、心当たりがあるんじゃないですか？」

やがて大矢は、重々しく口を開いた。

「よくあるデマかもしれないが、この街に、気象テロ組織のメンバーが出入りしているかもしれないという情報が入っている」

「気象テロ？でも、あんなものは、ただの噂でしょう？異常気象は、環境破壊のせいだ。人為的に竜巻や嵐を起こすなんて……」

「そのとおり。現在の技術では気象テロは不可能さ。せいぜい環境破壊の責任を、でっ上げた木偶人形に擦り付けているにすぎない。だが……」

「だが？」

「だが、ただの噂を、現実のものにしようとしてる奴らもいる。気象テロという、歪んだ神業を実現するために、暗躍している狂信者さ」

「そんな奴らがこの街に？でも、何の為に？」

「ESPだよ」

「……！」

「例えば、ESPの優秀な演算能力をもって、気象現象のダイナミックスな動学系を解析することができたなら、あるいは天気を操ることとは可能かもしれない」

「そんなばかな！解析できたところで、それを操るなんてこと、できるわけが……」

「そうかな？気象は非線形カオスの系なんだ。君はバタフライ・エフェクトという言葉聞いたことがあるかい？」

「っ！まさか……」

「そう。カオスは、『初期値に対して鋭敏』なんだよ。もしもカオスを完全に解析できるならば、蝶の羽ばたき程度のそよ風で、ハリケーンを起こすことが可能かもしれない」

×××

「急いで彼女を探さなければ」

大矢は車のエンジンをかけながらそういった。

「西部の再開発地区に向かうんですね？俺も行きます」

周はシートベルトを締めながらそういった。

「おいおい、一般市民の君が……」

と言い掛けて、大矢は途中で言葉を切った。

周の頑なな態度をみて、説得に応じることは決して無いだろうと、諦めたのだ。

それに大矢としても、この辺りの土地勘がある周が居たほうが、何かと助かるだろうという、合理的判断もあった。

大矢は助手席に周を乗せたまま、車を街の西へと走らせた。

×××

ボロい雑居ビルの入り口のところで雨宿りしていた葉月は、表の細い道に、一台の車がやってくるのを見つけた。

家のものが連れ戻しに来たのかと思い、一瞬身構えたが、それは見覚えの無い車だった。

その車 黒いセダン は、ビルの前の、猫の額ほどに狭い駐車スペースにつけて停まった。

やがて、後部座席から一人の男が出てきて、葉月に対してこういった。

「水杜葉月さんですね？私はESP特務の者です。あなたを保護します」

唐突にそういわれた葉月は、早くも自分の家出が頓挫しかかっていることを察知したが、悪あがきの時間稼ぎで、適当な言葉を選んで

いった。

「いつもの担当の…大矢さんはどうしたんですか？」

「彼はあなたを見失ってしまったために、私達に応援を頼んだのです」

「そうですか。でも私はいま、保護は必要ありません。それでは！」

葉月はなんとかして、さつさとビルの前を去ろうとしたが、後部座席から出てきたもう一人の男に通せんぼをされた。

「実は、あなたのお父さんが交通事故に遭われたのです。幸い、お怪我は軽いのですが、あなたを迎えにいつてほしいと…」

「…！」

これを聞いて、葉月の心は揺れた。父が事故？怪我？

葉月はしばしの沈黙とともに立ち止まっていたが、やがて車の方に向かって歩き出した。

「わかったわ。病院に向かってください」

それをみて二人の男は満足そうな顔でうなずき合い、それぞれもとの座席の側にまわった。

と、不意に葉月はきびすを返して走り出し、ビルの中へと駆け込んでいった。

二人の男は一瞬呆然とそれを見送っていたが、慌てて彼女を追いかけようと飛び出したのだった。

すると、助手席からもう一人の男がでてきてこう叫んだ。

「バカ！追うのは一人でいい！お前は裏口を見張ってる！俺はここで入り口を見張ってる！」

飛び交う怒号を背に、葉月はビルの階段を駆け上がっていた。

葉月は、決して家出を続行するために逃走しているのではなかった。

彼女の脳の、無意識的な演算の部分が、危険信号をならしていたのだ。

彼女の察知した違和感を言語化すると、以下のような感じになる。

- ・後部座席に二人も乗っているのは、弱小部署であるESP特務の車にしては不自然。
- ・むしろ、葉月を後部座席の真ん中に押し込んで、拉致するのに都合がいい。
- ・「保護する」といったり、「父の病院に連れて行く」と言ったり、言動が曖昧。
- ・その他、男達の挙動、気配、においが、警官らしくない。

これらの点を考えて、彼女は身の危険を感じたため、大人しく彼らに従うふりをしてから、ビル内に逃げ込んだのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0275w/>

---

異常気象のセカイ

2011年10月9日15時02分発行